

〈書評〉

高橋誠一郎著 『「罪と罰」を読む』

——「正義」の犯罪と文明の危機——』

刀水書房 1996年

沼田健哉

本書は、評者も所属している「ドストエーフスキイの会」の中核メンバーである、東海大学外国語教育センター助教授・高橋誠一郎氏によって、最近出版されたものである。

高橋氏は、東海大学文学部文明学科を卒業後、同大学文明研究専攻修士課程を修了している、ドストエーフスキー研究の専門家である。高橋氏は、在学中に交換留学生としてソフィア大学（ブルガリア）に2年間、モスクワ大学に1年間留学しており、ドストエーフスキーの研究者としては世界的に知られている人物である。

それにもかかわらず、評者のような専門外の間人が本書を書評の対象とするに至った主たる要因は、本書が、「文明論」という社会科学的視角から、『罪と罰』を分析していることにある。評者は、文芸社会学の確立に尽力し、ドストエーフスキーや宮沢賢治を分析するという目標を持っており、すでに、「マックス・ヴェーバーとドストエーフスキー——此岸と彼岸における救済を中心として——」という論文を執筆した。まもなく、宮沢賢治についても分析を試みるつもりでいる。

この2人の作家に関しては、すでに、作田啓一『ドストエーフスキーの世界』筑摩書房1988年、見田宗介『宮沢賢治——存在の祭りの中へ』岩波書店1984

年、があるが、率直に言って、評者は、この両者の研究にも完全には満足できない部分がある。

日本における文芸社会学研究の第一人者である作田啓一氏は、かつて「文学社会学研究会」を主催しており、評者も、二度程参加した経験を有している。この研究会を、さる著名な社会学者が、訪れその印象を関西社会学会において、以下のように語ったことがある。「社会学の荒荒しさが、文学の繊細さを傷つけてしまうので文学の社会学的研究は困難であるとの印象を受けた。」

評者も、ほぼ同じ見解であり、作田氏や見田氏のような世界的にみても超一流の天才的社会学者にしても完全にはなしえないことが、評者のような凡庸な研究者に到底可能とは思われず、絶望感におそわれていたというのが実情であった。

しかるに、高橋氏による本書は、ドストエフスキーの作品の社会科学的分析に、かなりの程度成功しているのである。したがって、本書を克明に分析することは、評者の今後の文芸社会学の研究にとっても有益であろうと判断したことも書評の対象とした理由の一つである。

高橋氏は、1993年の春に、『絶望から共生へ——ドストエフスキイの文明観』という題名の教養の授業用の教科書を作った。しかし、内容が哲学的であったらうに、扱った範囲も、処女作から『罪と罰』までと広く、ロシア文学に親しんでいない多くの学生にとっては難しかったようであったという。

そのため、本書は、『罪と罰』に焦点を絞るとともに、ラスコーリニコフとほぼ同時代を生きたシャーロック・ホームズを手がかりに、当時の歴史や哲学史にも触れながら、著名な文学作品や思想書と比較する中で、『罪と罰』の面白さと深さを知ることができるように構成したという。

すでに、江戸川乱歩は、ドストエフスキーの作品について、「どの一つをとっても、私のいわゆる心理的スリルの宝庫であって、ほとんどこの世のありとあらゆる型のスリルが、百科事典のように網羅されているといっても過

言ではない」と述べている。

高橋氏は、実際、ドストエフスキーは、文明論的な深い問題を考察するにあたって、難解な言葉でではなく、探偵小説仕立てで、面白く読めるような工夫をこらして書いていると述べている。したがって、高橋氏は、本書においても、このドストエフスキーの精神を生かして、シャーロック・ホームズを手がかりとして、探偵小説的なレベルの謎から、哲学的な謎までを推理小説のような形で解いていくように構成している。

高橋氏は、「西欧文明の危機とドストエフスキー」という題の序文において、ヘッセが、ヨーロッパ、中でもドイツの青年層が、自分たちにとってもっとも偉大な作家として、ドストエフスキーを選んでいることを述べている。

そして、高橋氏は、ヘッセのドストエフスキーの作品を論じた一連の論文が第一次世界大戦の後で書かれており、その一つが、『カラマーゾフの兄弟、あるいは西洋の没落』と題されていることに注目する。この戦争の直後、シュペングラーの『西洋の没落』が発刊され、版を重ねていたが、それは、西欧文明に対する懐疑や危機感が高まっていたことと深く結びついていたとする。高橋氏も述べているように、この書においては、文明も他の有機体と同じように、発生、成長、老衰、死滅の過程をたどり、他の多くの文明と同じように西欧文明も、没落することが説かれていたのである。

ドストエフスキーは、『未成年』（1875年）の登場人物に「ヨーロッパの空に葬送の鐘の音が特にはげしくひびきわたっていた」と言わせて、ヨーロッパの黄昏を指摘しているが、ヘッセは、以下のように述べている。「われわれが、ドストエフスキーの作品に夢中になるのは……ドストエフスキーの創作が、ここ数年来ヨーロッパを内からも外からも呑み込んでいる解体と混沌を、これに先んじて映し出した予言的なものであると感じるのである」。

高橋氏は、ここには、ドストエフスキーの作品にたいするヘッセの文明論的な関心が現われているとみ、さらに、ドストエフスキーの作品が、日本の作家にも強い影響を及ぼしてきたことを指摘する。高橋氏は、このようなド

ストエフスキーの強い影響力は、山本新が『周辺文明論』で述べているように、日本の文明開化の形態が、ロシアにおける西欧文明の受容の形ときわめて似ていることによって説明できるとする。

ところで、『罪と罰』の主人公の青年は、人間を「非凡人」と「凡人」に二分し、ナポレオンのような非凡人には、悪人を殺すことも許されるのだという理論のもとに、高利貸の老婆を殺害したことになっている。このような理論は、『神なき時代の頂言者——ドストエフスキーと現代——』の著者である勝田吉太郎が指摘しているように、次元を個人から民族にまで拡大することにより、「優秀な」民族には「悪い」民族を滅ぼすことも許されるとして、ユダヤ民族の絶滅を計ったヒトラーの理論を連想させるとする。

高橋氏は、松前重義の「現代文明論」の授業を通して現代文明への関心を開かされたと述べているが、松前重義の『現代文明論』の中には、「平和を求めながら、平和を確立しえないでいるのが現代である」という指摘に加え、「真に平和な社会を築くことは、現代文明の第一の課題である」という記述が含まれている。

唐木順三も、物理学に現われた新しい理論に基づき、新しい構想が文学などの分野にも現われていることを指摘し、「それを世界観にまで築きあげることによって西欧的近代を超えた現代を形成することが我々の時代に課されているのではないか。その場合、ドストエフスキーは新しく先駆的文学として検討されるに相違ない」と述べている。

高橋氏は、文明論的な視点から『罪と罰』を分析しようとして、ドストエフスキーが強い影響を受けたロシアやヨーロッパの作家の中には、西欧文明がかかえる問題点や危険性を深く認識し、それを乗り越えようとしていた者がいたことを指摘する。

『罪と罰』が出版された3年後に、ダニレーフスキイの『ロシアとヨーロッパ』が出版され、ドストエフスキーは、プーシキン・ゴーゴリ・レールモントフ・トルストイ等のロシアの作家や、ユゴー・バルザック・ディケンズ

・ポー等の西欧の作家の思索や文学的手法を学ぶことにより、近代西欧文明に関する批判的な考察をさらに深めていったものと、高橋氏は考えている。

本書の核となった論文としては、以下の四論文があげられている。「ラスコーリニコフの世界観における『時』の構造」(1984年)、「ラスコーリニコフの自然観をめぐって—感情と身体の働きを中心に」(1985年)、「『罪と罰』における良心の構造」(1987年)、「『罪と罰』における都市の構造」(1990年)、以上、東海大学文明学会機関誌『文明研究』掲載。さらに、高橋氏は、東海大学文明研究所の論文集『文学と文明—現代文明論講義より』に掲載した「ドストエーフスキイの文明観—長編小説『罪と罰』を中心に」(1992年)は、それまでの考察をまとめる契機となったと述べている。このような経過を経た結果、本書は、以下のような各章節により構成されている。

序章 過渡期の時代

試行者—ラスコーリニコフ 犯罪者と名探偵 善良な犯罪者 過渡期

第一章 犯罪へのいざない

新しい女姓—ドゥーニャ 「マルファの死」の謎 酔っぱらい—マルメラードフ 決められた世界 正義のための「犯罪」 完全犯罪の試み

第二章 謎としての自己—感情と身体の問題

ベルの音 意図しなかった第二の殺人 現出する過去 目撃者としての身体

第三章 自己の鏡としての他者

苦学生—ラズミーヒン 中年の婚約者—ルージン 「功利主義」の思想 受難者—ソーニャ 正反対の性格の奇妙な類似

第四章 隠された理念—非凡人の理論

記憶にない論文 ナポレオンの形象 英雄の崇拜と「非凡人」の思想 「非凡人」の思想から「超人」の思想へ 「変身」の試み

第五章 他者との闘争

二人の追跡者 予審判事—ポルフィーリイ 「自然淘汰」の法則 農奴

の所有者——スヴィドリガイロフ 「権力」への意志

第六章 他者とのつながり

自己と他者 「合理主義」の批判 「未来」への信頼 「正教」の理念
「共存」の構造

第七章 自然の認識

「うっそうたる森林」の謎 「自然支配」の思想 人類滅亡の悪夢 ラス
コーリニコフの復活 「自然界の調和」の思想

終章 良心に従って殺すことは可能か

殺人の後も平穏な「良心」 様々な「良心」理解 決して誤ることのない
「良心」 「論理」の罠 文明間の闘争 闘争から共生へ

以上のように、前に書いた学術論文をベースとして、一種の推理小説として、『罪と罰』を捉えなおしつつ、その内容を読者に可能なかぎり平易に提示しようというのが本書の主たるねらいといえよう。

高橋氏は、大多数の推理小説とは異なり、『罪と罰』においては、冒頭から犯人が誰かは分かっているが、「自分は何者か」というラスコーリニコフの思索や行動を通して、「自己とは何か」「人間と自然の係わりのあり方」といった、より大きく深い謎の解明へと進んでいったものとして位置づけている。

高橋氏は、第一章から第六章において『罪と罰』を西欧の文学作品や思想書と比較し、文学的な面白さを味あわせつつ、ラスコーリニコフの思想と行動を考察している。高橋氏は、ドストエフスキーは、小説という手法により、人間心理をその無意識の深みまで捉え、当時ロシアにも広がっていた「功利主義」や「弱肉強食」の思想をも、複雑な人間関係の中で具体的に検討し得ているとみなしている。そして、第七章においては、ラスコーリニコフの犯罪が、自然から疎外される一方では、自らも自然を低次元と認識する彼の自然観とも深く結びついているとし、新たな共生の理念をドストエフスキーは、提示したものとみなしている。

終章において、高橋氏は、ドストエフスキーが投げかけた「良心に従って殺すことはできるか」という問いに対して考察を加え、現代文明の大きな課題である「平和」の問題と関連させて論述している。

高橋氏は、以上のように、『罪と罰』に独自の解釈を加えつつ探偵小説風に再構築し、ラスコーリニコフという個人の心理分析を行ないつつ文明間の闘争という、マクロ的な次元にまで論を展開している。そして、最後には、個人や国家や民族のすべてのレベルにおける闘争から共生への理念の転換をも提示しようとしている。

以上のように、文学作品を通じて個人の心理分析を行ないつつ文明論にまで考察を拡大していく高橋氏の論述は、きわめて、てぎわよく説得力に富んでいる。高橋氏は、ドストエフスキー以上に誠実な人格の持主であり、ドストエフスキーが、作品の中で描いている殺人を通じて読者に訴えたかったものは、「殺すなかれ」という思想であり、かつ、目的は手段を正当化せず、他者を抹殺することは、自己の死にもつながるということであつたとしている。

以上の高橋氏の分析に関連して、若干評者の私見を述べさせていただくと、評者は、凡人か非凡人かの区別はそれ程重要なものではないと考えている。作田啓一氏も述べているように、すべての人は非凡人ではなく凡人なのであるから、非凡人には人を殺すことが許されて凡人には許されないという理論はほとんど意味がないといえよう。

ナポレオンのような人間が多くの人間を殺しながら称賛され、ふつうの人間が平時に一人を殺して殺人の罪にとわれる理由は、戦争においては、外国人を殺すことが自国にとって利益をもたらすと考えられているからであり、一国内の平時における殺人は、国民に不安を与え、害をなすと考えられるが故に悪とみなされるのである。戦争において多くの人を殺した人間はいつの時代においても英雄視されてきたのである。この問題は、社会科学的に相当部分解明が可能といえよう。

さらに、心理学的にみるならば、良心とは、「個人の社会的行動にかかわる社会規範の内面化によって形成される道徳的価値体系」であり、精神分析でいうなら超自我に当たるものである。したがって、評者は、『罪と罰』において提示されている問題は、高橋氏が考えている以上に宗教的な問題であると考えている。

評者は、隅谷三喜男氏の講演においても確認したことであるが、「創世記」においては、神のように善悪を知るようになることが原罪とされているのである。すなわち、本来神が判定すべき善悪を人間が自分で判断することが原罪なのである。

ところで、高橋氏は、『罪と罰』の「罪」を表す「プレストップレーニェ」が、「踏み越える」、あるいは「またぐ」、という意味であることを指摘しているが、この言葉を評者は、人間が神からの自由を求めて善悪を自分で判断しようとして踏み越えるという意味で用いていると解釈している。

さらに、高橋氏は、「やせ馬が殺される」夢に注目しているが、それは、ラスコーリニコフが七歳の頃に見た情景であるとともに、ドストエフスキー自身が幼い頃、父親とともにペテルブルグへ行く際に実際にみた光景と関連している。

しかし、高橋氏は、ソーニャの母親であるカチェリーナ・イヴァーノヴナが、死ぬまぎわに次のように述べている部分には言及していない。「……いよいよお別れの時が来たよ……。さようなら、ソーニャ、お前も運の悪い子だねえ！……みんなしてこの瘦せ馬を乗りつぶしてしまったんだ……わたしはもうくたくたに疲れてしまっ—た—よ！」

この「やせ馬」とは、神に無慈悲に見捨てられる人間を象徴していると評者は考えている。『罪と罰』という作品も、『カラマーゾフの兄弟』においてより明確に提示されている神義論が究極のモチーフといえる。善悪の判断を人間に許さない程抑圧的な神が、いったい我々にいかなることをしてくれるのか？ この問いこそ、ドストエフスキーが一生悩み続けたものの一つと

いえよう。そして、説明が不可能な程の苦難の中で神と信仰を求める人間の生きざまを、彼は、比類ない力強さで描いた作家といえる。ところで、いかなる神義論をもってしても納得できないような事態が生じることがある。カレン・アームストロングは、『神の歴史』において、多くのユダヤ教徒にとって、伝統的な神の理念は、ナチスによるホロコーストの後では不可能なものになってしまったと述べている。ノーベル賞受賞者のエリー・ウィーゼルは、子供のときハンガリーで、ただ神のためにだけ生きていたという。少年となった彼は、まずアウシュヴィッツ、ついでブッヘンヴァルトへと移された。死のキャンプでの最初の夜、彼の母と妹の体が投げ込まれた焼却炉から黒い煙が立ち昇るのを見つめて、彼は、その炎が自分の信仰を永遠に焼き滅ぼしてしまったのを知ったという。

そして、さらに、ある日、ゲシュタッポは一人の子供を絞首刑にした。ウィーゼルの記憶では、「悲しげな天使」のような顔つきだったこの少年は、だまって、蒼白な顔で、物静かに絞首台に登っていったという。ウィーゼルの背後で、一人の囚人が「神はどこにいるのだ？ 神はどこにいるのだ？」と問いを発した。その子供が死ぬのに一時間かかり、その時、ウィーゼルは自分の内部の声が以下のように言うのを聞いたという。「神がどこにいるのかだと？ ここにいるさ。――彼はこの絞首台の上にぶら下がっているのだ。」

カレンは、さらに以下のように述べている。「ドストエフスキーは、一人の子供の死が神を受け入れ難くさせうると言ったが、非人間性ということを知らないではなかった彼ですら、このような状況での子供の死を想像することはできなかった。……多くのユダヤ教徒はもはや、自らを歴史のなかに顕現する聖書的な神……を承認できない。……人格的神という理念は、困難さに満ちている。もしこの神が全能であったならば、ホロコーストを防げたはずだ。彼がそれを止めることができなかったならば、彼は無能で無益である。もし彼がそれを止めることができたのに、止めようとしなかったのならば、

神は怪物である。……ある日のこと、アウシュヴィッツで一群のユダヤ教徒が神を裁判にかけたという話があった。彼らは残虐さと裏切りのかどで神を訴えたのだ。彼らは……ヨブのように、何の慰めも見出せなかった。彼らは……神を有罪とし、おそらく死刑に値すると考えたのだ。ラビが判決を言い渡した。そして彼は天を見上げ、言った。裁判は終わった。夕方の祈りの時間だ、と。」

ここには、神に死刑を言い渡しつつも、信仰を捨てることができない人々が描かれている。超越的な全智全能な神ではなく、人々のすぐそばにいて共に苦しむ神がありうる。そして、神の子とされるイエス・キリストもまさにそれに似た存在であったといえよう。

『罪と罰』の創作ノートには、ラスコーリニコフに自首を勧めた後にソーニャは、「いっしょに苦しみに行くんですもの、いっしょに十字架を負いましょうよ」と語りかけている。このソーニャの言葉に従って、まず大地に接吻したあと、警察に向かって歩き出したラスコーリニコフに、「ある一つの幻がちらと目にうつった」と書かれているが、この「幻」は創作ノートでは「キリストのまぼろし」と説明されている。

この部分に関し、高橋氏は、このラスコーリニコフが見た「幻」とは、「十字架という重荷を背負って自分が処刑されることになるゴルゴダの丘へと向かうキリストの幻影だった」と述べている。ソーニャは、ある意味ではキリストと同体であり、ラスコーリニコフに、自分と同じように、十字架の重荷を背負うことを勧めているのである。そう、人類の苦難という重荷を。

エピローグの中で、裁判においてラスコーリニコフが大学在学中に何度か自分を犠牲にして他者を助けたことが明らかにされている。これは、まさしく宮沢賢治が行なったことであり、宗教が奇跡をもたらすという意味は、なにか超自然的な現象を生じさせるというよりは、むしろ、信仰がごくふつうの人間を自分を犠牲にしてまで、他者の救済を行ないうる人間へと変化させる力を有していることを指しているのではなからうか。

作田啓一氏は、エピローグの以下の部分をラスコーリニコフの回心として捉えている。「不意に何物かが彼を引つつかんで、彼女〔ソーニャ〕の足もとに投げつけたようなことになった。彼は泣いて彼女の膝を抱きしめた。……その瞬間に彼女はすべてを了解した。彼女の目は無限の幸福に輝いた。彼女は理解したのである。」

ソーニャが、キリストと同体という側面を有しているが故に、これは単なる恋愛物語としてではなく、ラスコーリニコフがキリストを受け入れた事の象徴的表現と解釈すべきであろう。

さらに、高橋氏は、中村健之介氏が、ラスコーリニコフの突然に見える復活を「自然とのふれあい」の面から説明していることにも注目している。ラスコーリニコフは、雄大なシベリアの自然に触れることにより、「幻想都市ペテルブルグの魔力から逃れる」ことができたのである。

ところで、殺人を告白したラスコーリニコフに対して、ソーニャは、以下のような命令をしている。「今すぐに行って四辻に立ちなさい。そして叩頭し、まずおまえが汚した大地に接吻し、そして全世界に、四つの方向に叩頭し、みんなに言うのです。『私が殺しました』と。そうすれば神は再びおまえに生を与えてくれるでしょう。行くわね、行くでしょう？」

この部分からもうかがわれるように、ソーニャは、「大地の女神」でもあるといえよう。世界一ともいわれる人工的都市において衰弱した大地母神は、雄大なシベリアの自然において蘇る。ラスコーリニコフとソーニャの愛は、一人の男と一人の女の愛というよりは、人間のイエス・キリストと大地母神との再結合の象徴であるともいえよう。

このような点からみても、ドストエフスキーの小説は、それ自体が一種の神話ともみなしうるものであり、深く宗教的背景によってうらづけられているのである。

したがって、高橋氏の研究は勝れたものではあるが、より宗教的な側面に目を向けるべきであろう。これに対して、小林秀雄は、『「罪と罰」について

Ⅱ」を以下のような文で終えているのは、さすがに慧眼としかいいようがない。「ラスコオリニコフは、監獄に入れられたから孤独でもなく、人を殺したから不安なのでもない。この影は、一切の人間的なものの孤立と不安を語る異様な（これこそ真に異様である）背光を背負っている。見える人には見えるであろう。そして、これを見て了った人は、もはや『罪と罰』という表題から逃れる事は出来ないであろう。作者は、この表題については、一とも言も語りはしなかった。併し、聞えるものには聞えるであろう、「すべて信仰によらぬことは罪なり」（ロマ書）と。」